

# 調査結果の 総括

|            |                           |    |
|------------|---------------------------|----|
| <b>I</b>   | 体力合計点・総合評価・<br>運動意欲.....● | 8  |
| <b>II</b>  | 運動習慣・生活習慣.....●           | 12 |
| <b>III</b> | 体育・保健体育の授業.....●          | 18 |
| <b>IV</b>  | 学校の特徴.....●               | 23 |

## I

## 体力合計点・総合評価・運動意欲

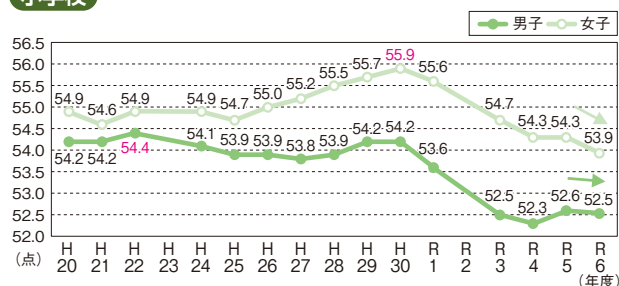
## ■ 体力合計点(P.30、P.32～34、P.36～37、P.53、P.58～59、P.78～79)

令和6年度における小学校5年生及び中学校2年生の体力合計点は、令和5年度と比較して、小学校は男子で0.1点、女子は0.4点減少した。中学校では、男子

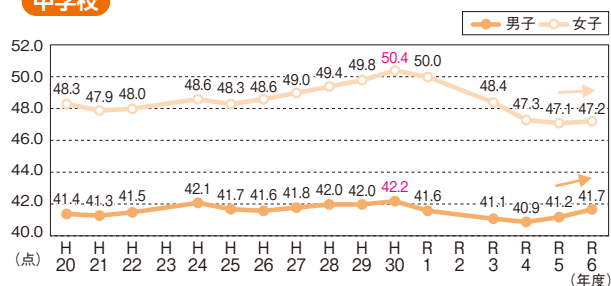
は0.5点、女子は0.1点増加した〔図1〕。総合評価のC以上の割合は、小学校は男女とも減少、中学校では、男子は増加、女子は減少した〔図2〕。肥満傾向児の割合は、小中学校男女ともに2年連続で減少している〔図3〕。

〔図1〕 体力合計点の経年変化

## 小学校

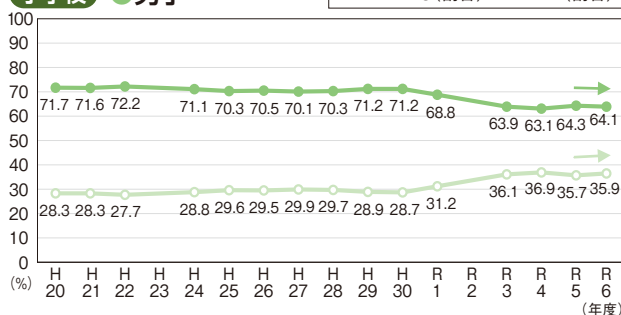


## 中学校

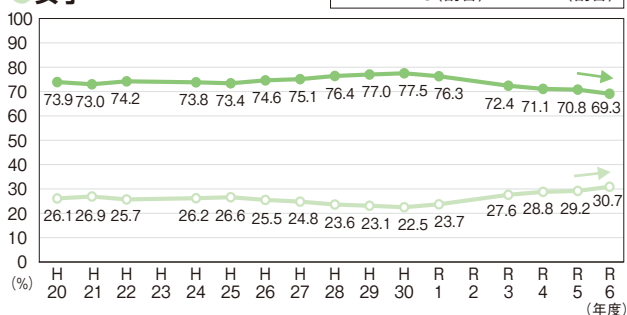


〔図2〕 総合評価(段階別)における〔A+B+C(割合)〕と〔D+E(割合)〕の経年変化

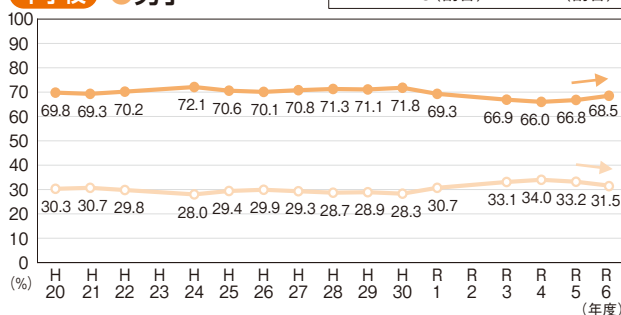
## 小学校 ● 男子



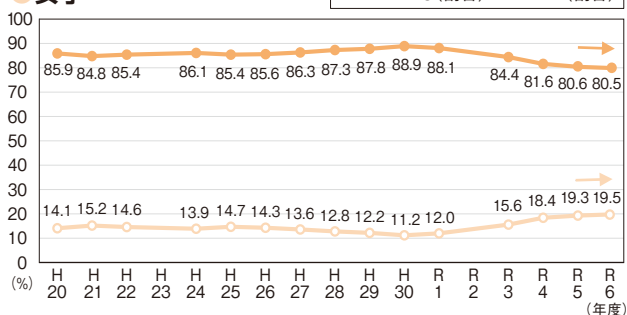
## ● 女子



## 中学校 ● 男子

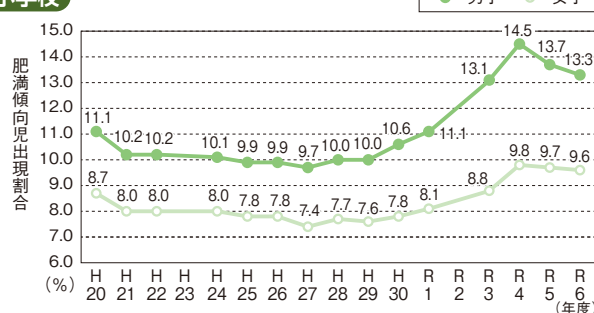


## ● 女子

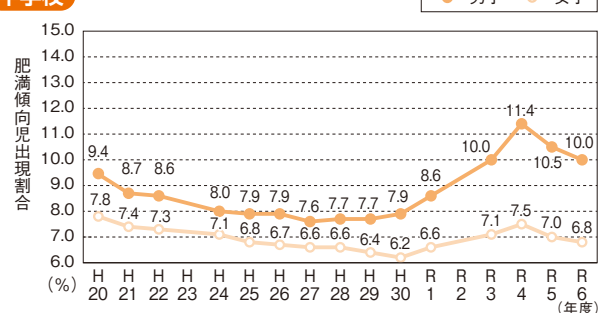


〔図3〕 肥満傾向児の出現割合の経年変化

## 小学校



## 中学校



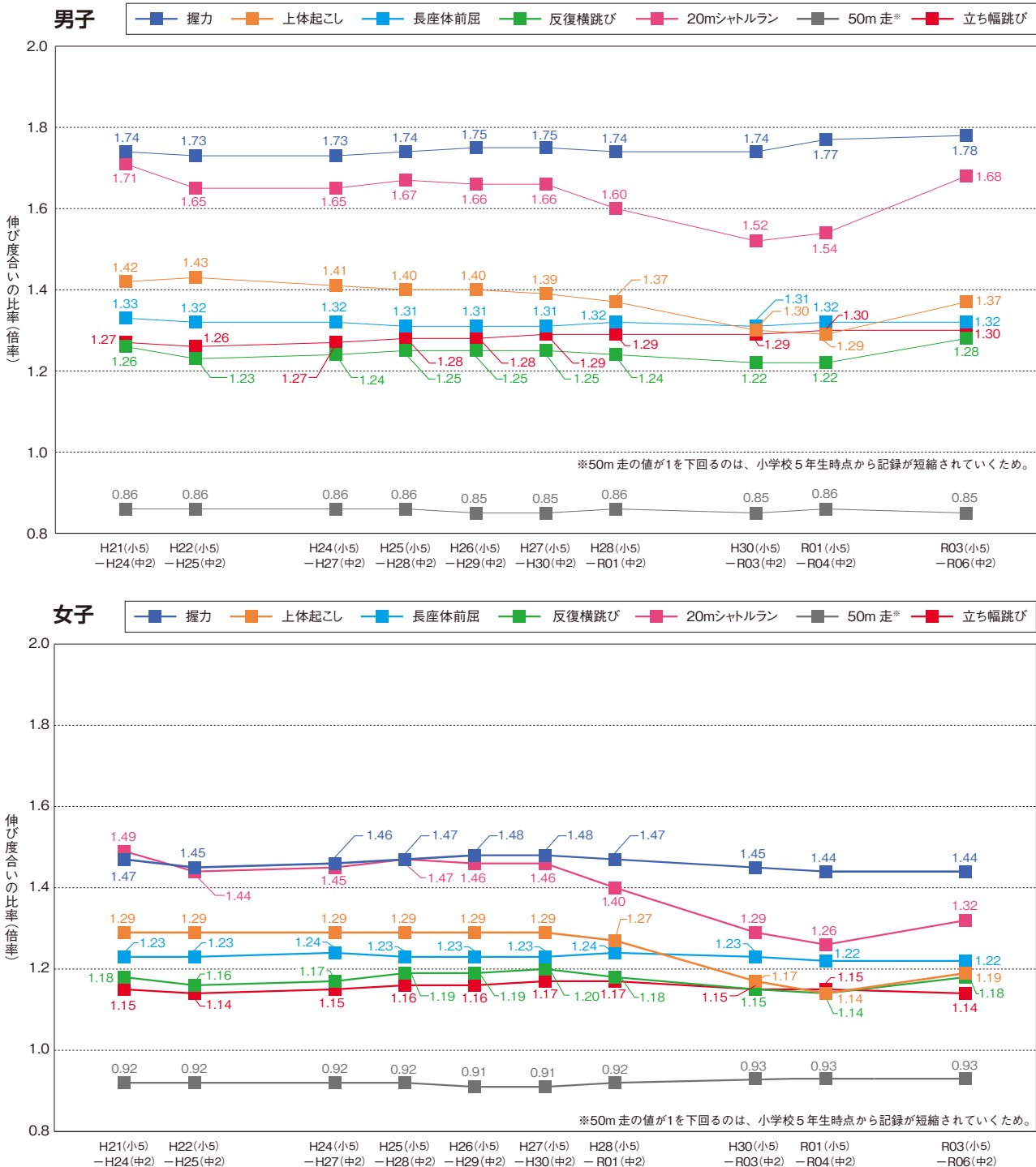
## ■ 小学校5年生から中学校2年生までの記録の伸び (P.32、P.36)

小学校5年生から中学校2年生に至る3年間の記録の伸びについて、小学校5年生時点の記録を1とした比率で表し、持久走とボール投げを除くテスト項目をグラフに表現した〔図4〕。小学校5年生から中学校2年生までの期間において、毎年ほぼ同程度記録が伸びて

いる様子が確認できた。持久力が関連するテスト項目（20mシャトルランと上体起こし）において、令和3年度から令和4年度にかけて中学校2年生の記録の伸びが鈍化した。令和6年度には男女とも伸び比率が戻りつつあるが、上体起こしをはじめ一部の項目では新型コロナウイルス感染症蔓延前の水準には至っていない。

〔図4〕 小学校5年生から中学校2年生までの伸び比率の経年変化

※この図は、小学校5年生時点を1とした場合、中学校2年生時点で記録が何倍に伸びたかを示している。



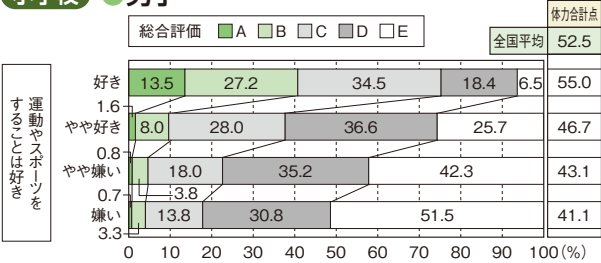
■ 体力合計点と運動やスポーツに対する意識との関連(P.73、P.93)

体力合計点・総合評価と運動やスポーツをすること

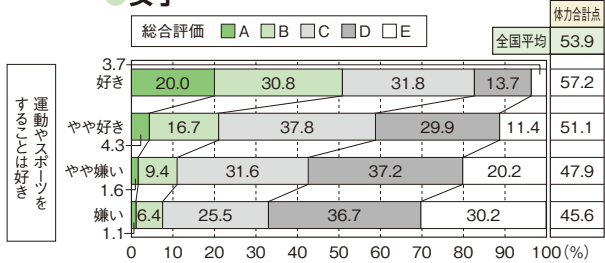
は好きかどうかの関係をみると、運動やスポーツは好きと答えた児童生徒ほど体力合計点や総合評価が高くなる傾向が見られた〔図5〕。

〔図5〕 「運動やスポーツをすることは好き」×「総合評価と体力合計点」

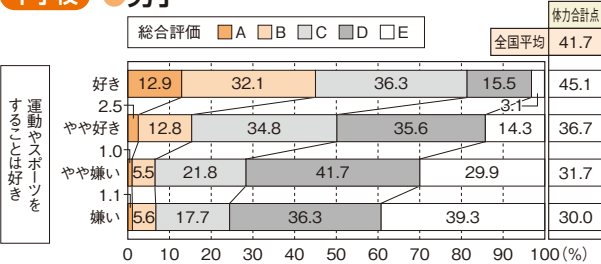
● 小学校 ● 男子



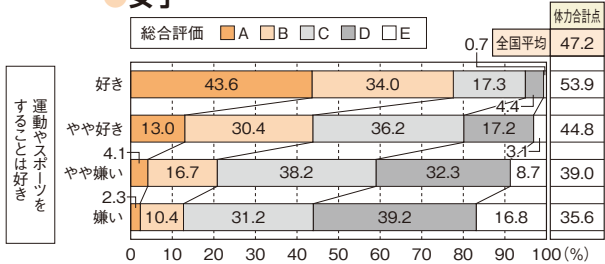
● 女子



● 中学校 ● 男子



● 女子



■ 卒業後の運動への意欲(P.45)

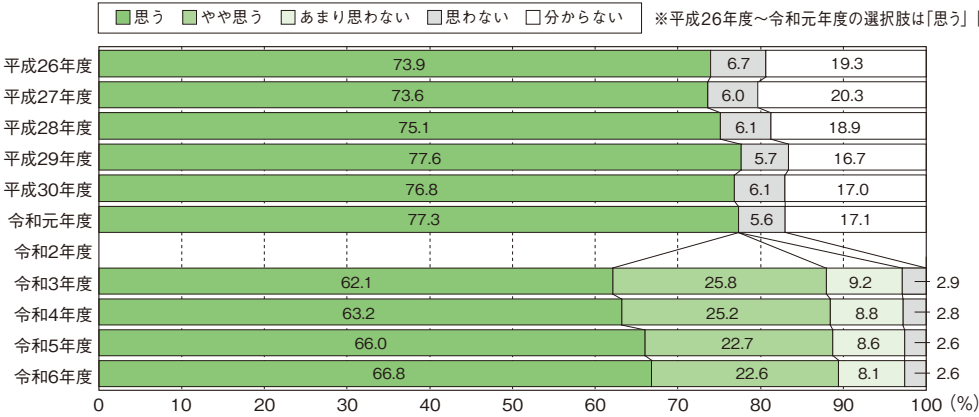
卒業しても運動する時間を持ちたいと「思う」と回答した児童生徒の割合は、令和5年度と比べ、小学校

では男子は0.8ポイント、女子は0.7ポイント、中学校は、男子は0.5ポイント増加したが、中学校女子は2.1ポイント減少した〔図6〕。

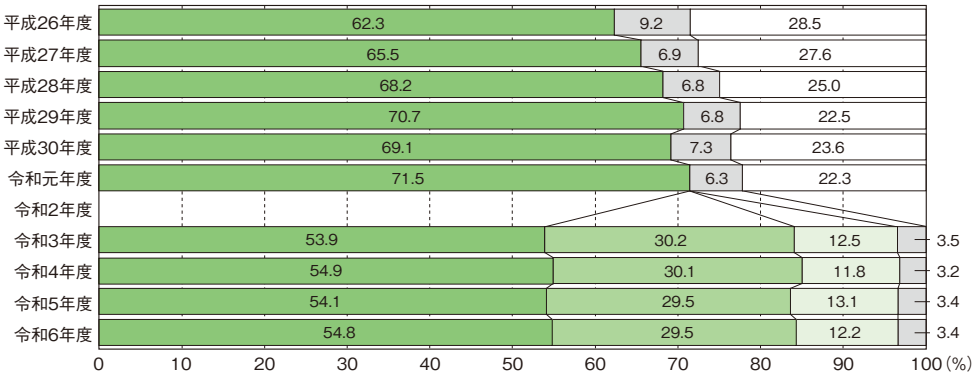
〔図6〕 「卒業しても運動する時間を持ちたいと思う」の経年変化

● 小学校

● 男子

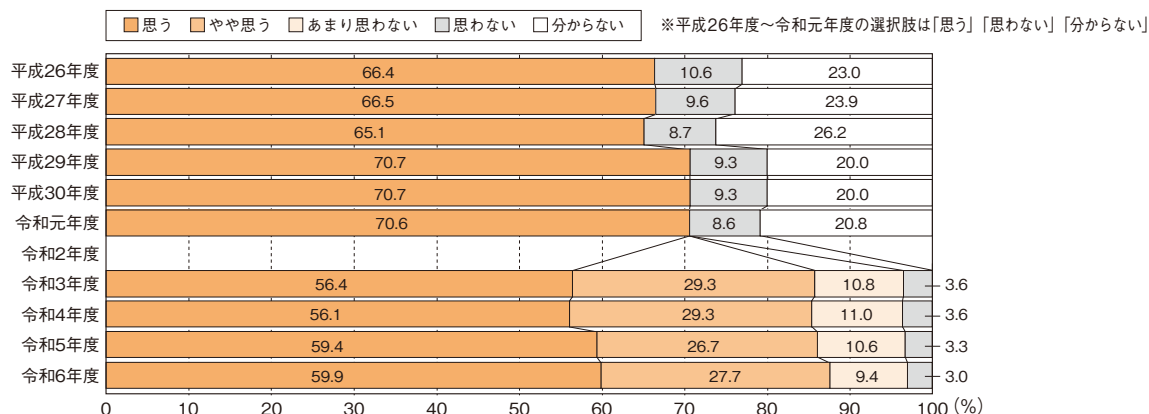


● 女子

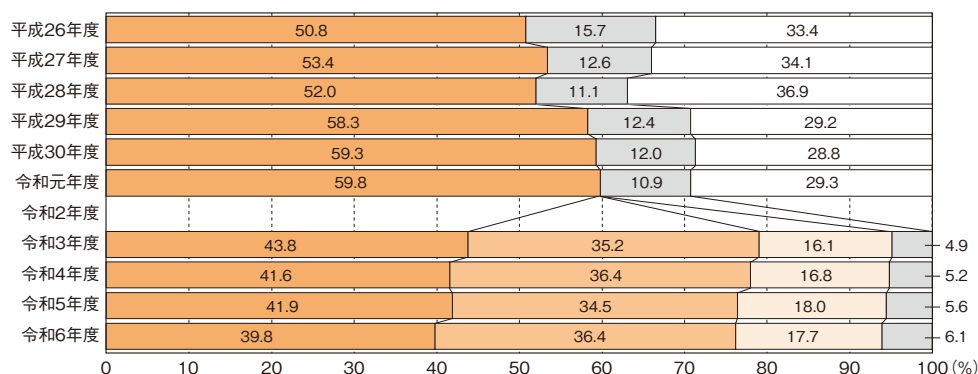


## 中学校

## 男子



## 女子



## Ⅱ 体力合計点・総合評価・運動意欲」のまとめ

体力合計点は、中学校男子では新型コロナウイルス感染症蔓延前の水準に戻ったが、小学校男子及び中学校女子では前年度からほぼ横ばいとなっている。特に、小学校女子では令和元年度以降、連続して低下している。また、肥満傾向児の割合を見ると、小中学校とも2年連続して減少しているものの、小学校女子ではその減少が僅かとなっている。第3期スポーツ基本計画では、総合評価C以上の児童の割合を80%以上に、生徒の割合を85%以上に増加させることを目指しているが、その水準には小中学校とも達していないため、引き続き、児童生徒の体力向上に向けた取組が必要である。

小学校5年生から中学校2年生に至る3年間の記録の

伸びについて、3年間に新型コロナウイルス感染症蔓延の時期が含まれている集団（令和3年度かそれ以降に中学校2年生になった集団）で持久力が関連するテスト項目（20mシャトルランと上体起こし）の記録の伸びが小さい傾向にあった。しかし、今年度中学校2年生になった集団ではその伸びが大きくなり、新型コロナウイルス感染症の影響が緩和されつつあることが示唆された。

卒業後に運動を継続する意欲については、この数年間、男子では上昇が続いているが女子では男子よりも低く、中学校女子においては低下している様子がうかがえる。第3期スポーツ基本計画では、卒業後にも運動やスポーツをしたいと「思う」「やや思う」児童生徒の割合を90%以上に増加させることを目指しており、引き続き、運動を継続する意欲の向上に向けた取組が必要である。

## Ⅱ

## 運動習慣・生活習慣

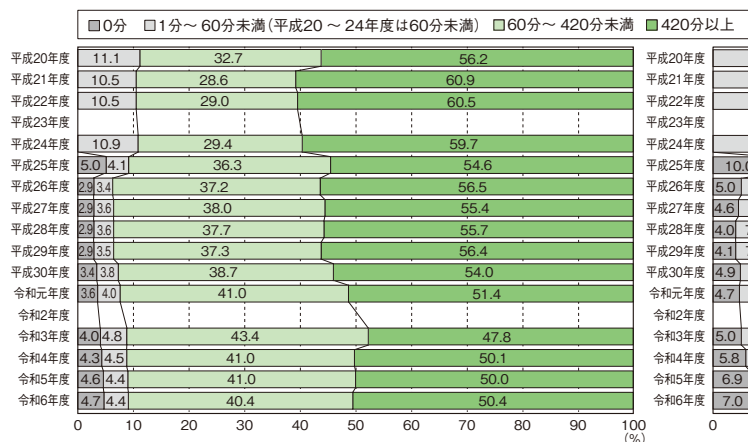
## ■ 1週間の総運動時間(P.38、P.41)

1週間の総運動時間420分以上の割合は、令和5年度と比較すると小学校は男子で0.4ポイント、女子は1.1ポイント増加した。中学校は男子で横ばい、女子は0.9ポイント減少した〔図7〕。60分未満と回答した児童生徒は、小学校男子を除き、令和5年度より減少し

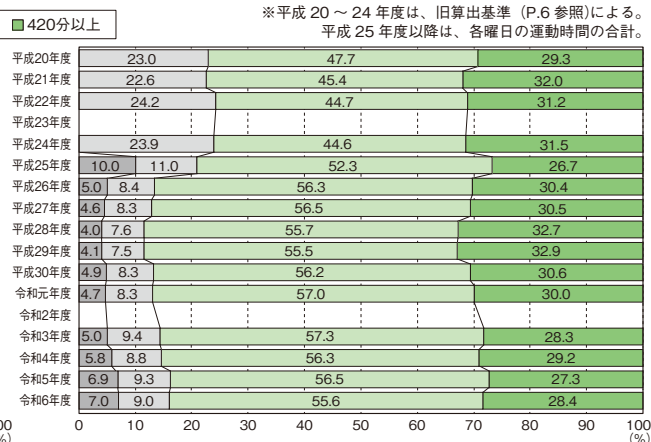
た。中学校女子では、運動時間0分の割合が17.0%となっており、小学校男女や中学校男子と比べても高い割合にあるが、令和5年度と比べ、4.0ポイント減少した。また、1週間の総運動時間と体力合計点との関連を見ると、420分以上の運動をする児童生徒は、体力合計点が高い傾向にある〔図8〕。

〔図7〕 1週間の総運動時間の経年変化

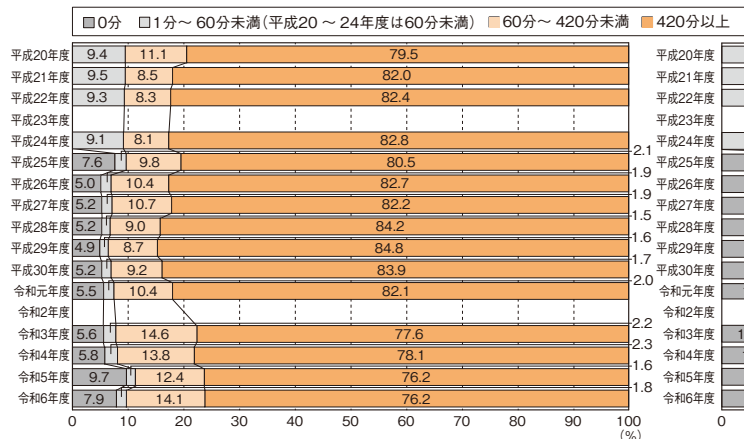
## 小学校 ● 男子



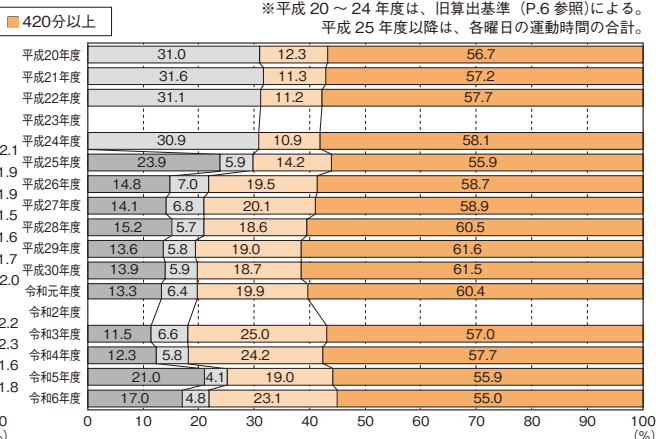
## ● 女子



## 中学校 ● 男子

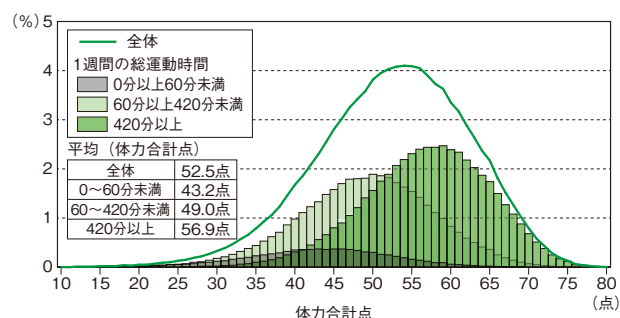


## ● 女子

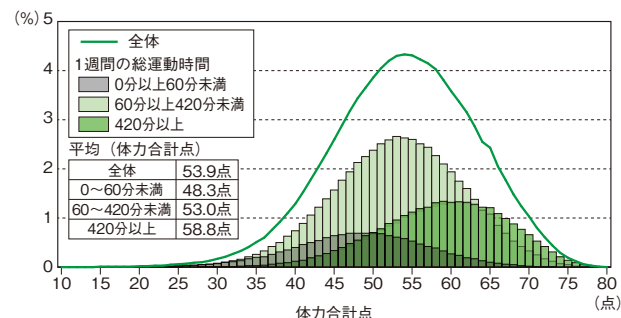


〔図8〕 1週間の総運動時間と体力合計点との関連

## 小学校 ● 男子

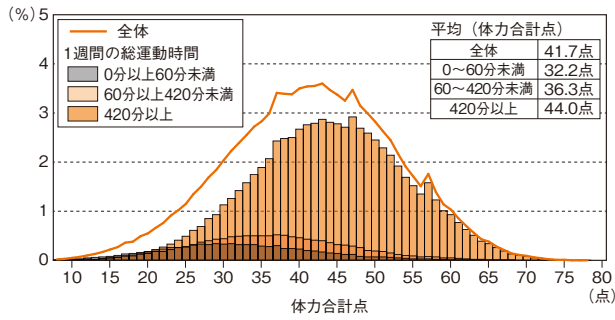


## ● 女子

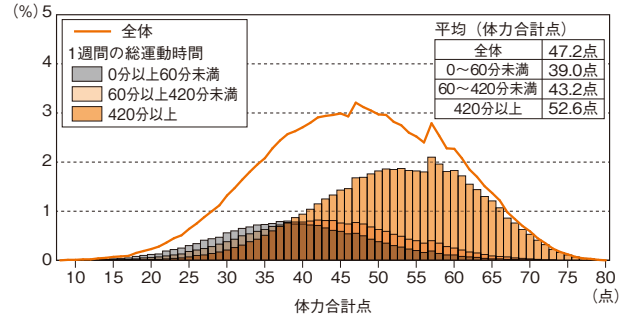




## 中学校 ● 男子



## ● 女子



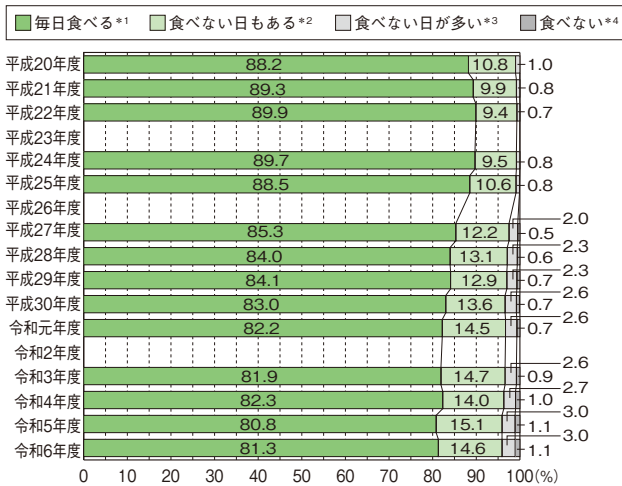
## ■ 朝食の摂取状況(P.47、P.49)

朝食の摂取状況を見ると、「毎日食べる」と回答した児童生徒の割合は、令和5年度に比べ、小学校は男子で0.5ポイント、女子で0.1ポイント、中学校は男子で1.7ポイント、女子で1.5ポイント増加した〔図9〕。

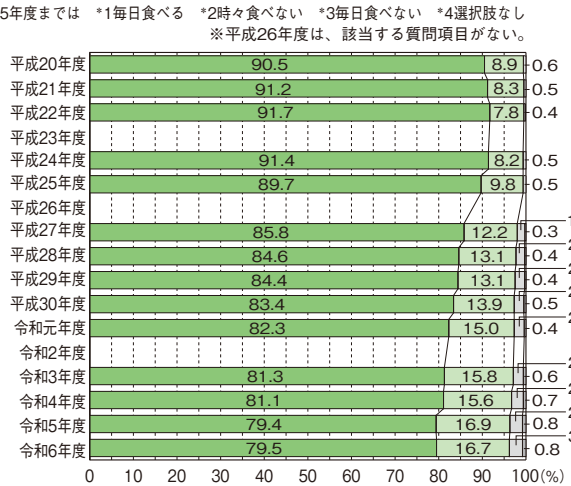
中でも、中学校女子に関しては、「食べない日もある」「食べない日が多い」「食べない」を合わせると25.5%となっており、昨年度より減少したものの、割合が大きくなっている。

〔図9〕 朝食の摂取状況の経年変化

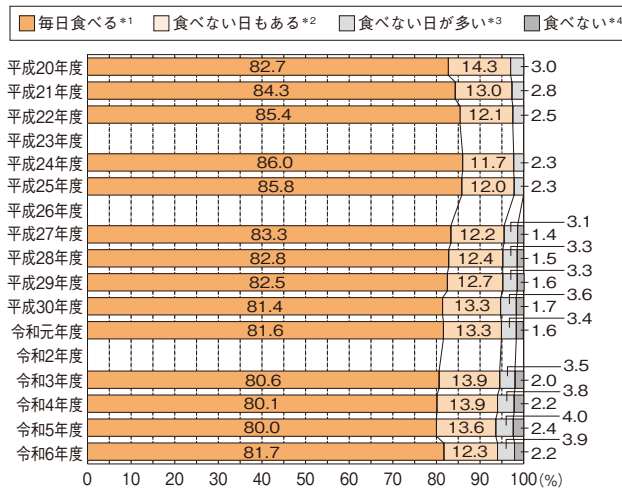
## 小学校 ● 男子



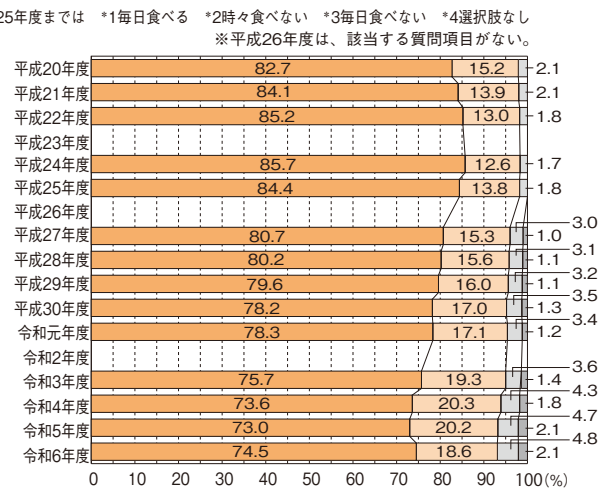
## ● 女子



## 中学校 ● 男子



## ● 女子



## ■ 睡眠時間の状況(P.47、P.49)

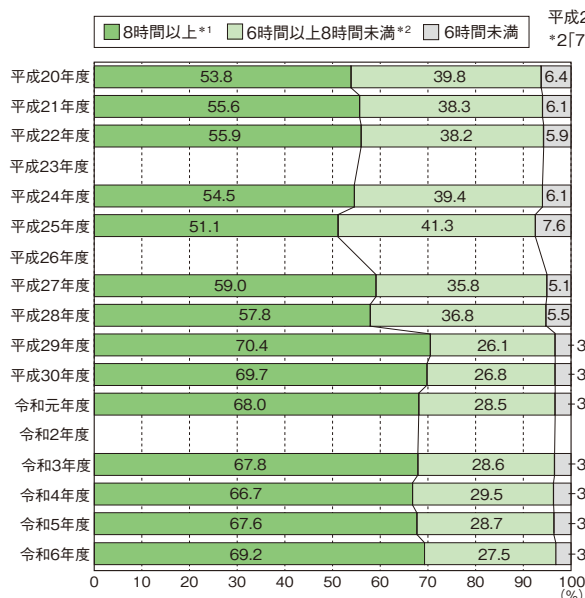
1日の睡眠時間の経年変化を見ると、8時間以上の割合については、小学校と中学校全てにおいて、令和5年度から増加した。小学校は男女とも1.6ポイント、

中学校では男子は6.2ポイント、女子は5.1ポイント増加しており、中学校での伸びが大きくなっている [図10]。

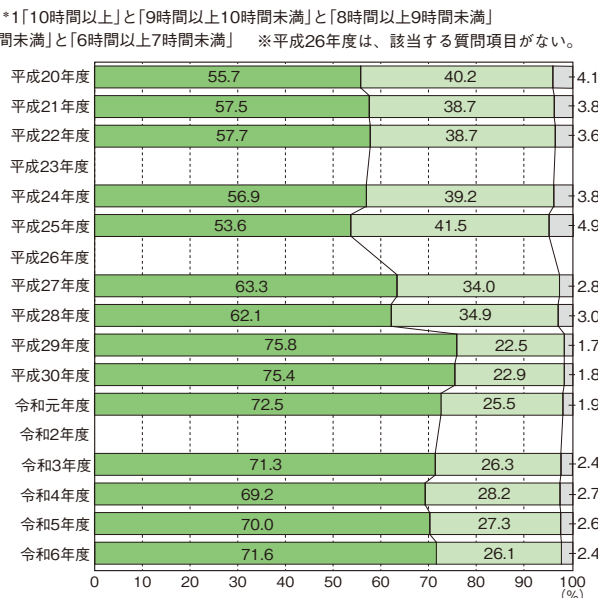
[図10] 1日の睡眠時間の経年変化

### 小学校

#### ● 男子

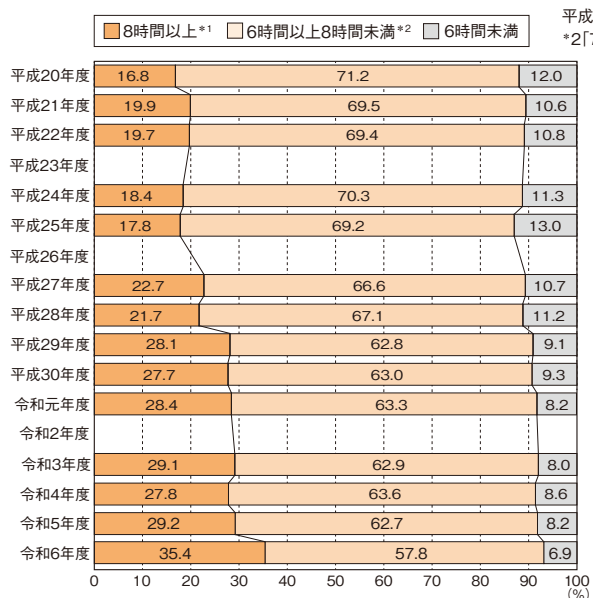


#### ● 女子

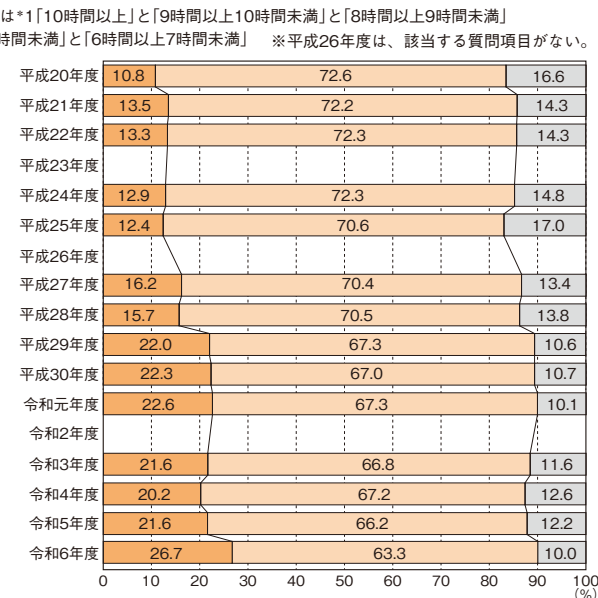


### 中学校

#### ● 男子



#### ● 女子





## ■ スクリーンタイムの状況(P.51～52)

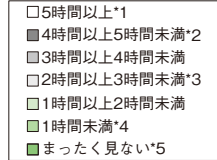
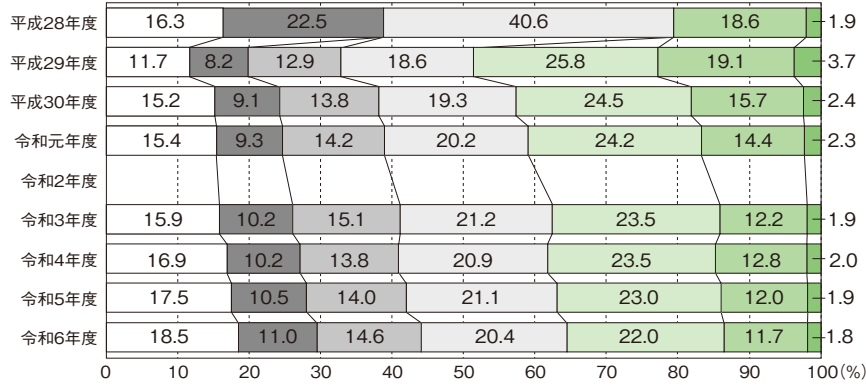
学習以外でテレビ、DVD、ゲーム機、スマートフォン、パソコン等の画面を視聴する時間の経年変化を見ると、5時間以上と回答した児童生徒の割合は、令和

5年度に比べ、小学校は男子で1.0ポイント、女子で0.8ポイント増加した。中学校は男子で0.2ポイント減少し、女子は横ばいだった [図11]。

【図11】 スクリーンタイムの経年変化

### 小学校

#### 男子



平成28年度は

\*1 5時間以上

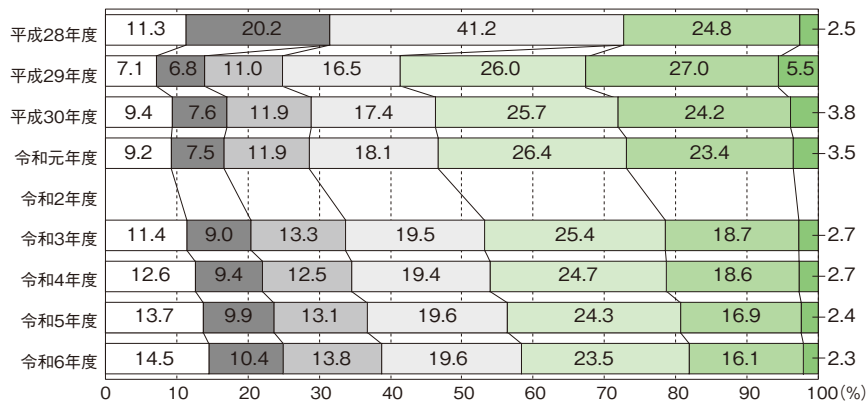
\*2 3時間以上5時間未満

\*3 1時間以上3時間未満

\*4 1時間未満

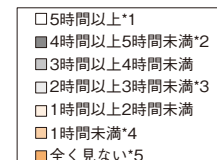
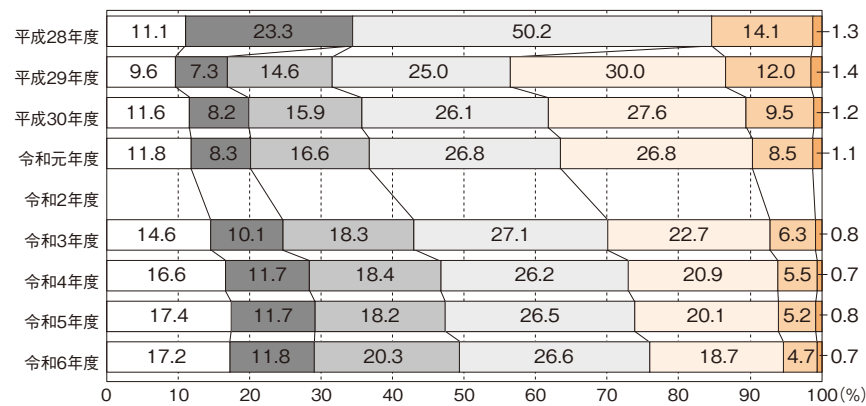
\*5 まったく見たり聞いたりしない

#### 女子



### 中学校

#### 男子



平成28年度は

\*1 5時間以上

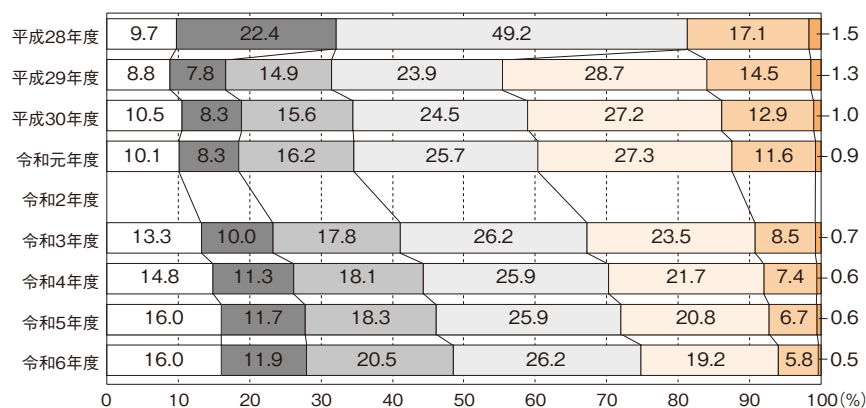
\*2 3時間以上5時間未満

\*3 1時間以上3時間未満

\*4 1時間未満

\*5 全く見たり聞いたりしない

#### 女子



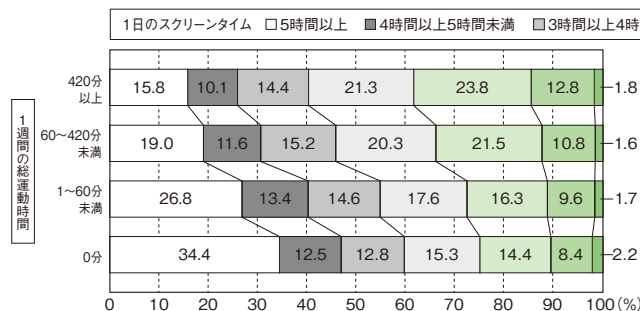
## ■ 運動習慣と生活習慣の関連(P.47～52)

1週間の総運動時間、朝食の摂取状況とスクリーンタイムの関連を見ると、小中学校男女ともに、運動時間が少ない児童生徒、朝食欠食が多い児童生徒ほど、スクリーンタイムが長い傾向にある〔図12〕〔図13〕。

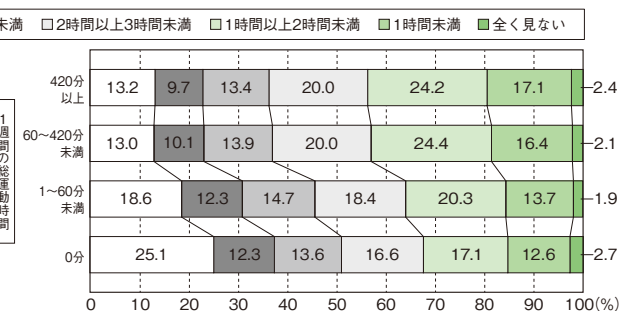
睡眠時間とスクリーンタイムの関連では、睡眠時間「10時間未満」までは、睡眠時間が長いほどスクリーンタイムが短くなる傾向にあるが、睡眠時間が「10時間以上」になると、スクリーンタイムが増加に転じている〔図14〕。

〔図12〕 「1週間の総運動時間」×「1日のスクリーンタイム」

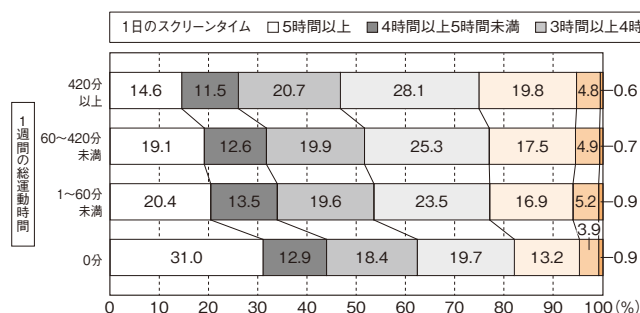
### 小学校 ● 男子



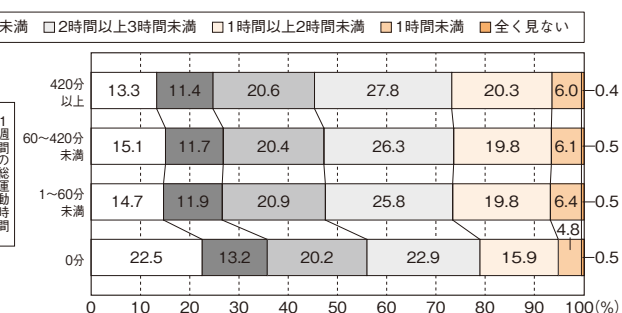
### ● 女子



### 中学校 ● 男子

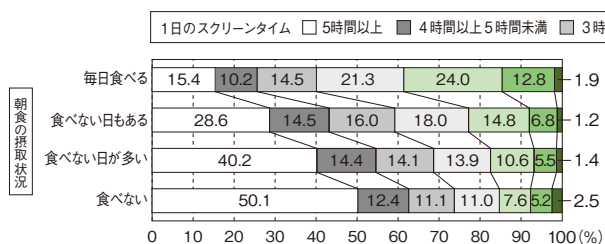


### ● 女子

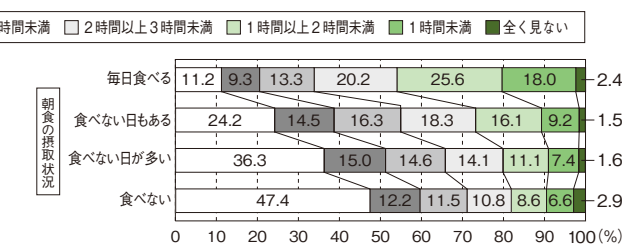


〔図13〕 「朝食の摂取状況」×「1日のスクリーンタイム」

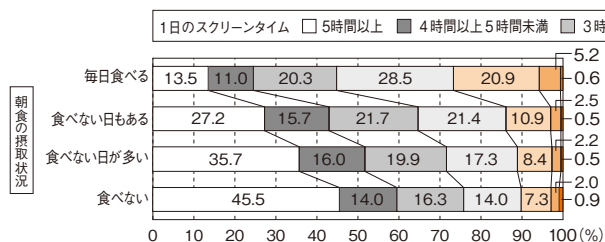
### 小学校 ● 男子



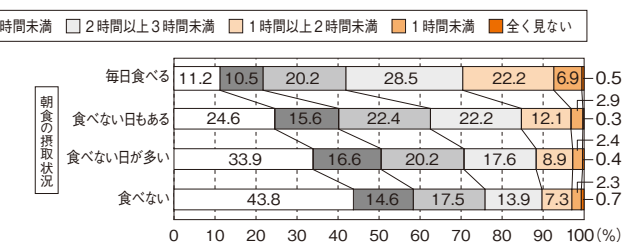
### ● 女子



### 中学校 ● 男子

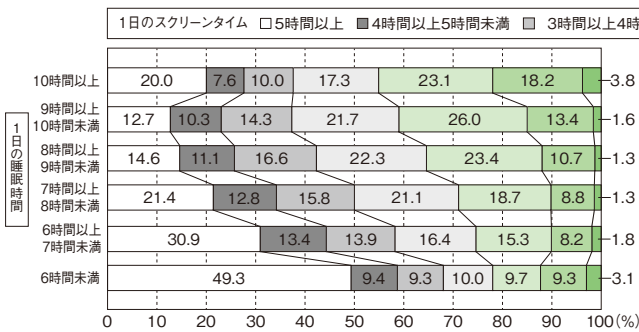


### ● 女子

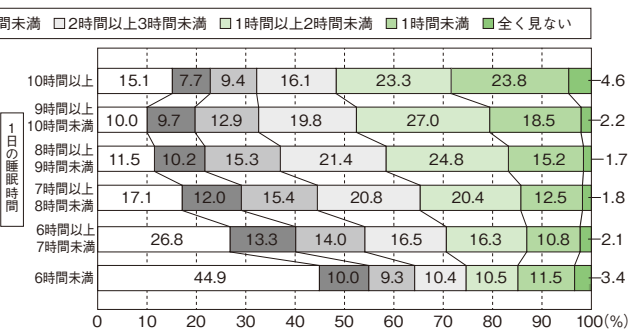


【図14】 「1日の睡眠時間」×「1日のスクリーンタイム」

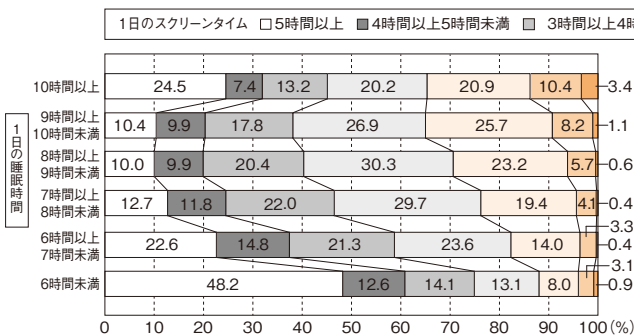
## 小学校 ●男子



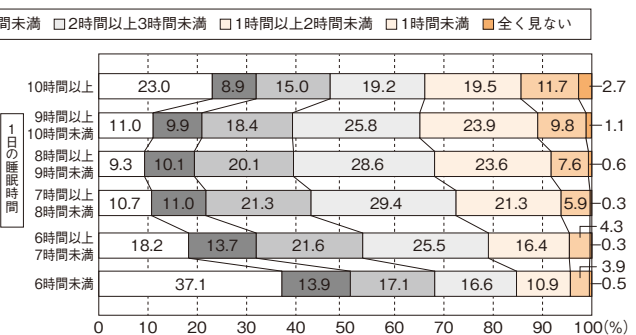
## ●女子



## 中学校 ●男子



## ●女子



## 「Ⅱ 運動習慣・生活習慣」のまとめ

1週間の総運動時間を令和5年度と比較すると、小学校は男女とも「60分未満」の割合に大きな変化はなく、「420分以上」の割合が微増した。中学校は男女とも「60分未満」の割合が減少した。一方、「420分以上」の割合は、男子は変化がなく、女子は平成20年度の調査以降、最も低い割合となっているため、引き続き、運動習慣の形成に向けた取組を進める必要がある。

朝食の摂取状況に関しては、「毎日食べる」と回答した児童生徒の割合は、令和5年度と比較して若干の増加が見られた。しかし、長期的な推移を見ると、小中学校男女ともに「毎日食べる」と回答する割合は減少傾向にあること、「食べない日が多い」及び「食べない」と回答する割合が僅かずつではあるが増加傾向にあり、小学校男女と中学校男子の5人に1人、中学校女子の4人に1人が朝食を欠食している状況にあった。朝食摂取については、体力との関係のみならず、様々な生活活動の源であり、朝食を「毎日食べる」と回答した児童生徒は、運動時間が長く、体力合計点が高い傾向がみられる(P.69、P.73、P.89、P.93)ため改善が望まれる。

睡眠時間に関しては、小中学校の男女とも「8時間以上」と回答する割合が増加した。特に、中学校では男

女とも5ポイント以上増加しており、児童生徒の睡眠状況は改善されつつあると言える。睡眠時間と体力合計点との関係を見ると(P.74、P.94)、小学校男子では「8時間以上10時間未満」、女子では「7時間以上10時間未満」、中学校男子では「7時間以上9時間未満」、女子では「6時間以上9時間未満」で体力合計点が高い値を示した。一方、小学校では「6時間未満」、中学校では「6時間未満」及び「10時間以上」で体力合計点が低くなっている。

スクリーンタイムは、令和5年度と比較して、小中学校の男女とも引き続き増加した。視聴時間が「3時間以上」と回答した児童生徒の割合は、小学校男子では44.1%、小学校女子では38.7%、中学校男子では49.3%、女子では48.4%であり、調査を開始した平成28年度以降、最も高い割合を示した。スクリーンタイムと体力合計点の関係では、小学校では「3時間以上」、中学校では男子は「4時間以上」、女子は「3時間以上」になると体力合計点が全国平均値を下回り、それ以上になるとさらに平均値が低下する傾向がみられた(P.74、P.94)。

運動習慣と生活習慣はそれぞれが関連し合っているため、項目ごとの状況のみならず、児童生徒が調和のとれた規則正しい生活の大切さを理解できるようにすることが求められる。

## Ⅲ

## 体育・保健体育の授業

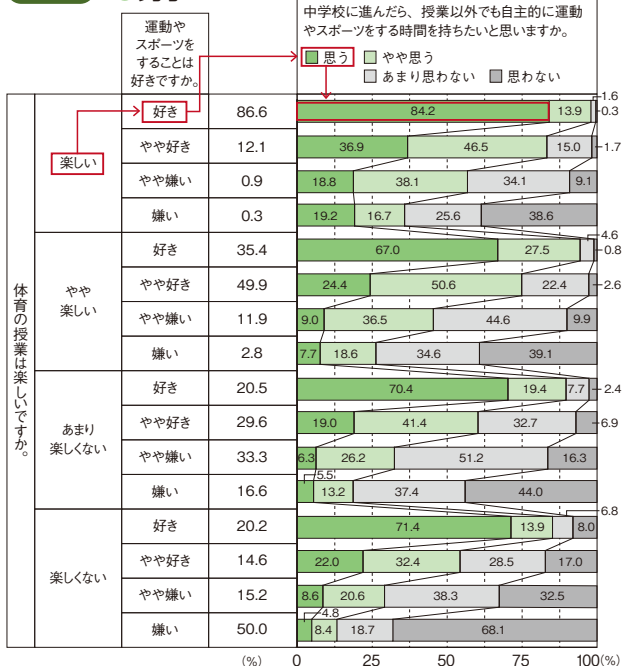
## ■ 「体育・保健体育の授業は楽しい」と「運動やスポーツは好き」、「卒業後に運動を継続する意欲」の関連(P.46、P.65、P.85)

体育・保健体育の授業は「楽しい」と感じている児

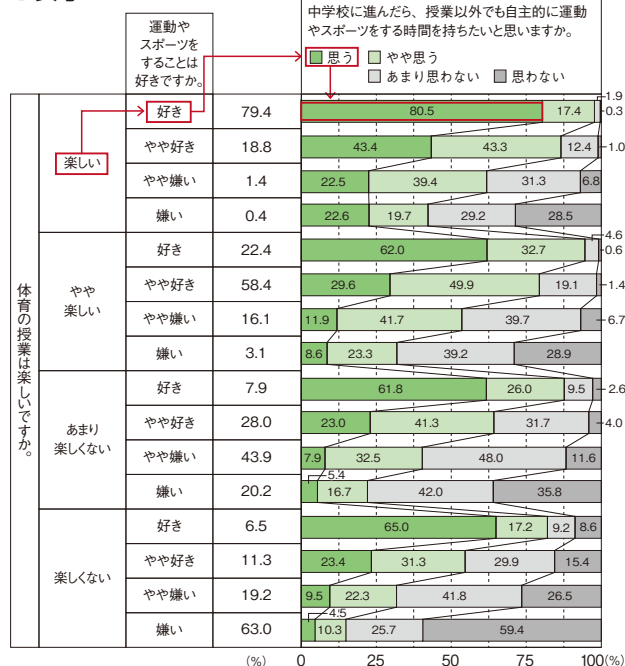
童生徒の多くが運動やスポーツを「好き」あるいは「やや好き」と回答している。さらにそのような児童生徒は「卒業後も運動したい」と考えている割合が高かった〔図15〕。

〔図15〕 「体育・保健体育の授業は楽しい」×「運動やスポーツは好き」×「卒業後の運動への意欲」

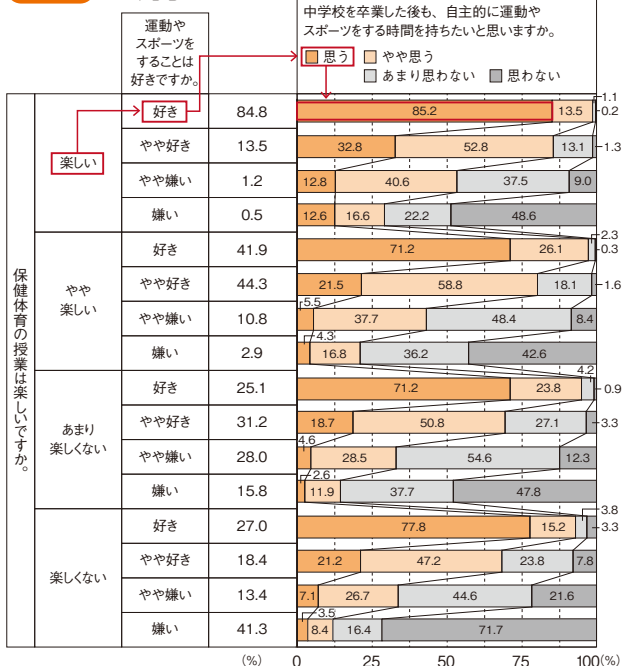
## 小学校 ●男子



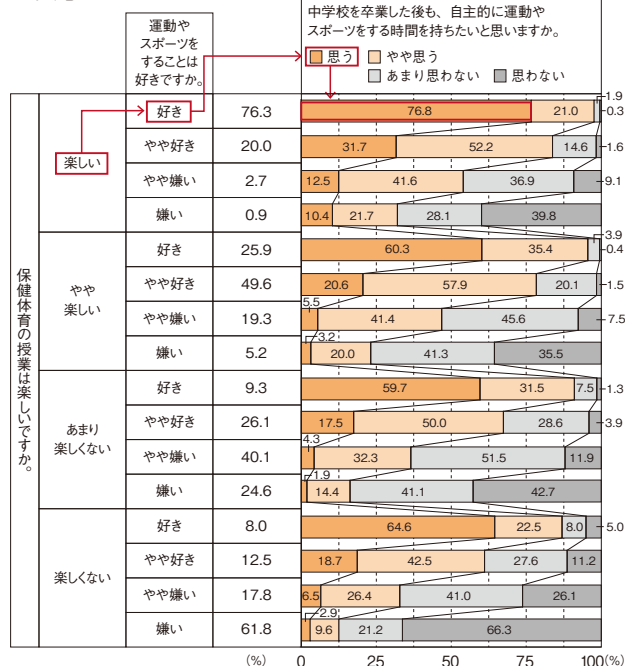
## ●女子



## 中学校 ●男子



## ●女子



## ■ 体育・保健体育の授業の取組(P.65、P.68、P.70、P.72、P.74、P.76、P.85、P.88、P.90、P.92、P.94、P.96)

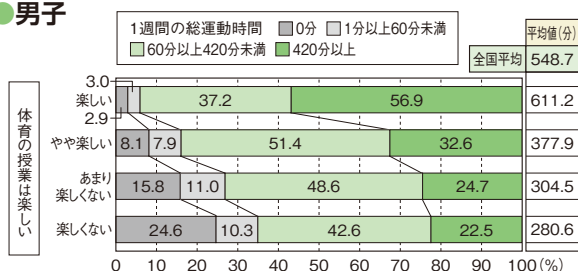
体育・保健体育の授業は「楽しい」と感じている児童生徒は、「1週間の総運動時間」が長く、「総合評価と体力合計点」と体力合計点「卒業後の運動意欲」も高かった〔図

16〕〔図17〕〔図18〕。「保健を学習して、もっと運動をしようと思うようになった」と回答した児童生徒は、「1週間の総運動時間」が長く、「総合評価と体力合計点」が高く、さらに「卒業後も運動したい」と考えている割合が多かった〔図19〕〔図20〕〔図21〕。

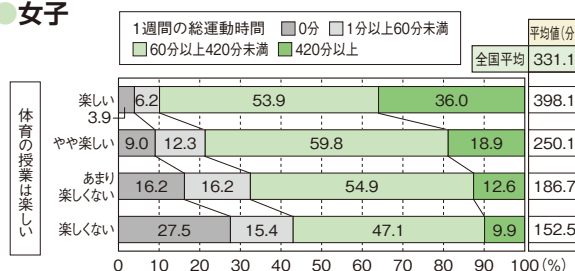
〔図16〕 「体育・保健体育の授業は楽しい」×「1週間の総運動時間」

### 小学校

#### ● 男子

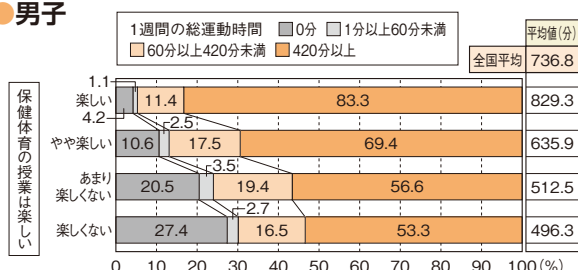


#### ● 女子

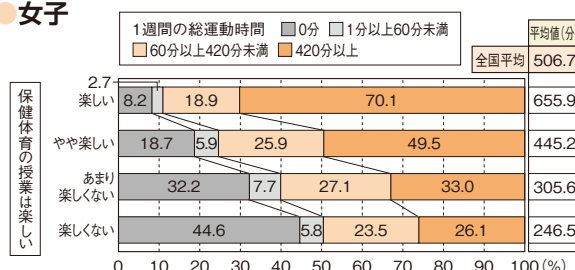


### 中学校

#### ● 男子



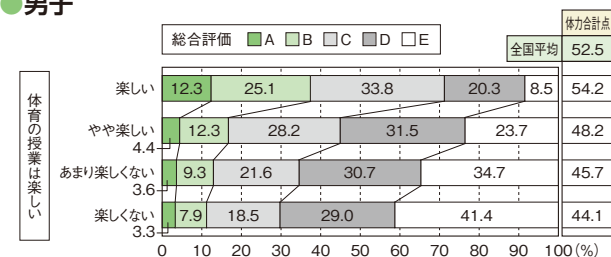
#### ● 女子



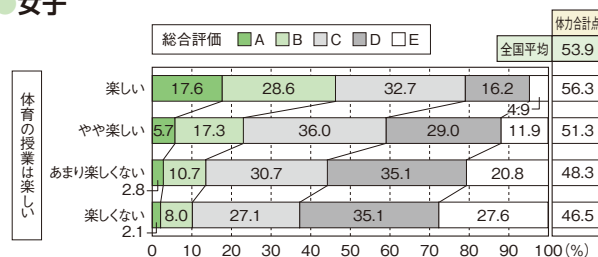
〔図17〕 「体育・保健体育の授業は楽しい」×「総合評価と体力合計点」

### 小学校

#### ● 男子

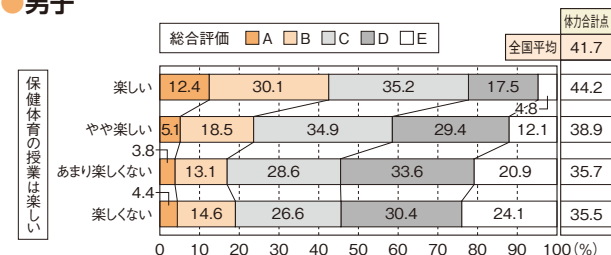


#### ● 女子

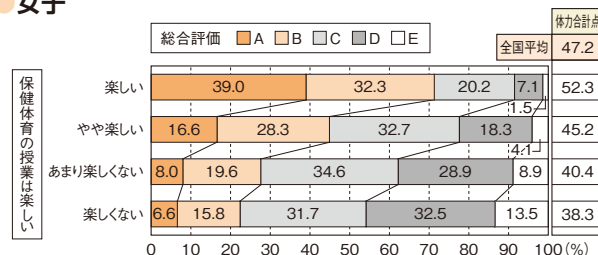


### 中学校

#### ● 男子



#### ● 女子

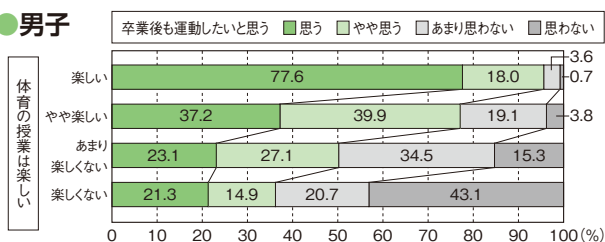




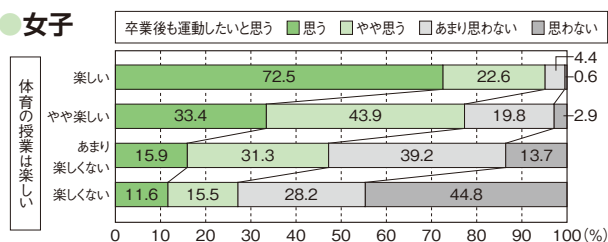
〔図18〕 「体育・保健体育の授業は楽しい」×「卒業後も、運動やスポーツをする時間を持ちたいと思う」

## 小学校

## 男子

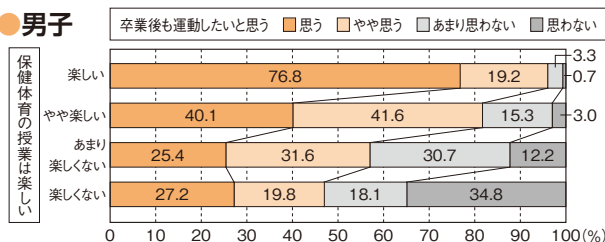


## 女子

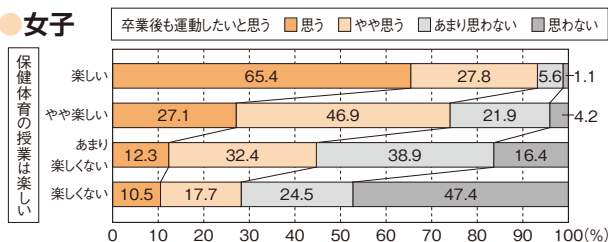


## 中学校

## 男子



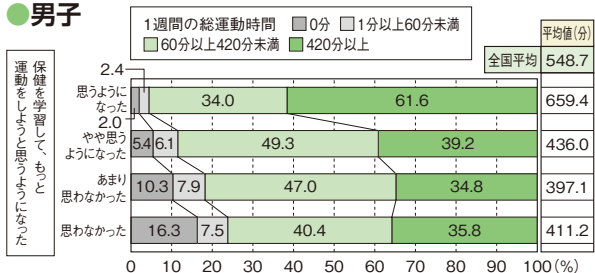
## 女子



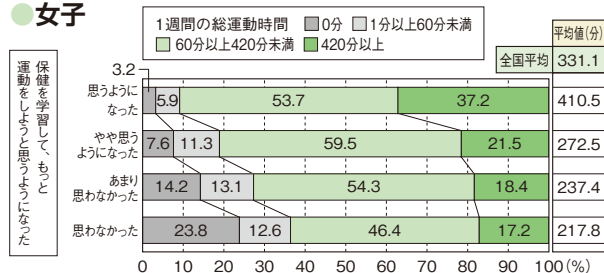
〔図19〕 「保健を学習して、もっと運動をしようと思うようになった」×「1週間の総運動時間」

## 小学校

## 男子

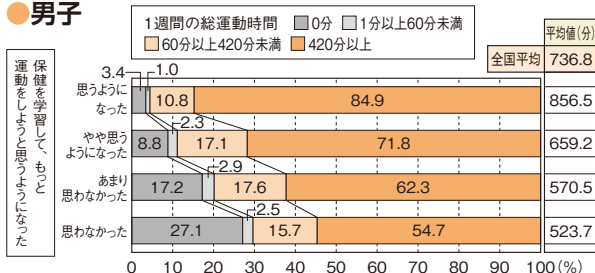


## 女子

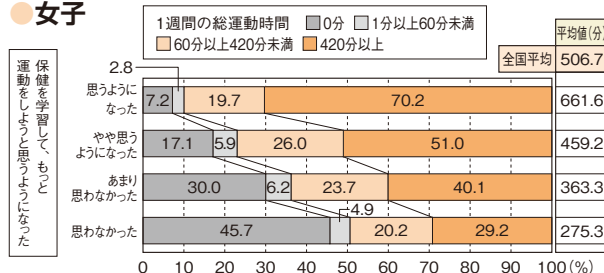


## 中学校

## 男子



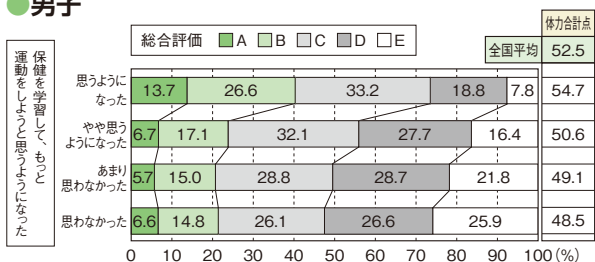
## 女子



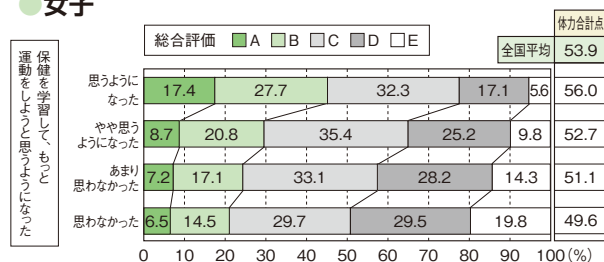
〔図20〕 「保健を学習して、もっと運動をしようと思うようになった」×「総合評価と体力合計点」

## 小学校

## 男子



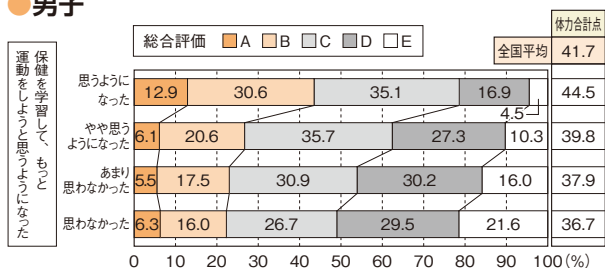
## 女子



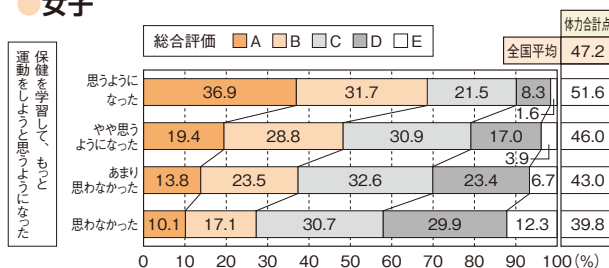


## 中学校

## 男子



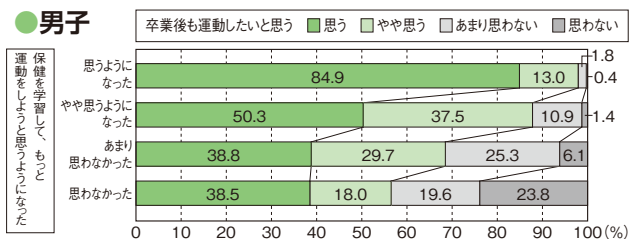
## 女子



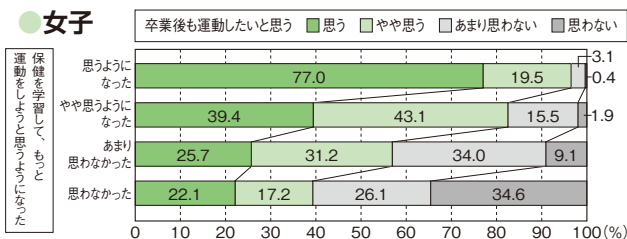
〔図21〕「保健を学習して、もっと運動をしようと思うようになった」  
×「卒業後も、運動やスポーツをする時間を持ちたいと思う」

## 小学校

## 男子

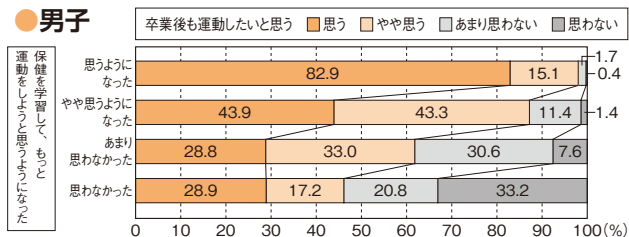


## 女子

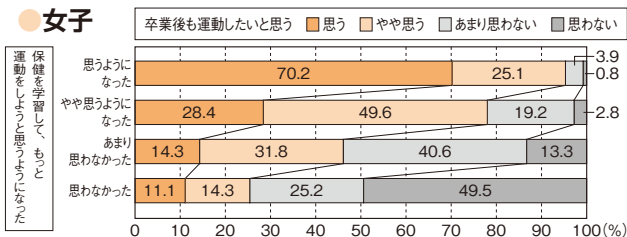


## 中学校

## 男子



## 女子



## 児童生徒と学校の意識(P.62、P.82、P.101)

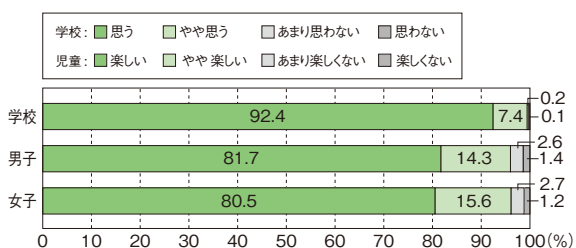
児童生徒が「体育・保健体育の授業が楽しいと感じるとき」と、教師が「児童生徒が体育・保健体育の授業が楽しいと感じていると思うとき」を比較すると、「できなかったことができるようになったとき」につ

いては、学校が児童生徒より肯定的に捉える傾向があった。また、「体を動かしてスッキリした気分になったとき」については、男女で傾向の違いが見られ、男子の方が肯定的に捉える傾向が確認された。

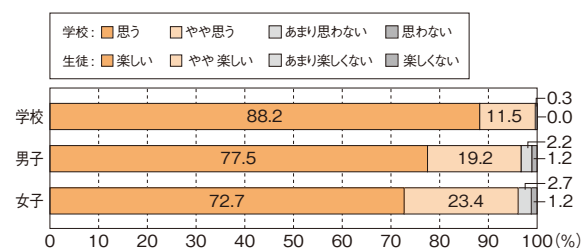
〔図22〕 児童生徒質問紙「体育・保健体育の授業が楽しいと感じるとき」、  
学校質問紙「児童生徒が体育・保健体育の授業が楽しいと感じていると思うとき」

## ●できなかったことができるようになったとき

## 小学校



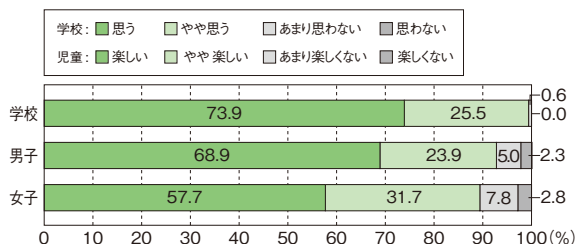
## 中学校



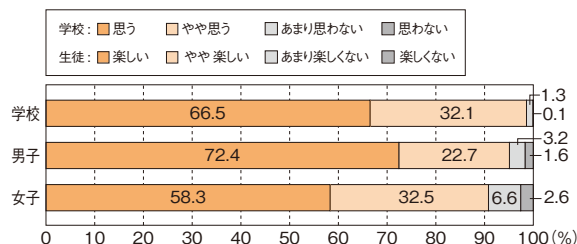
【図23】 児童生徒質問紙「体育・保健体育の授業が楽しいと感じるとき」、  
学校質問紙「児童生徒が体育・保健体育の授業が楽しいと感じていると思うとき」

●体を動かしてすっきりした気分になったとき

小学校



中学校



### 「Ⅲ 体育・保健体育の授業」のまとめ

体育・保健体育の授業は「楽しい」と回答している児童生徒は、運動やスポーツへ好意的な態度を持ち、卒業後の運動継続への意欲も高いことがわかった。一方、体育・保健体育の授業や運動・スポーツに否定的な回答をした児童生徒は、卒業後の運動意欲に対しても否定的に回答する割合が高い傾向がみられた。児童生徒の運動習慣、体力合計点、運動継続への意欲それぞれと、授業を楽しみと感じることとの間に大きな関係があると考えられるため、特に、体育・保健体育の授業が「あまり楽しくない」、「楽しくない」といった否定的な態度を持つ児童生徒の充実感を高める取組が求められる。

また、「どんなときに体育の授業が楽しいと感じるか」の問いに対して、児童生徒ともに「できなかったことができるようになったとき」「友達と交流したり、協力できたとき」と回答した割合が高かった（P.62、P.82）。達成経験を重ねることや仲間と関わりながら協働的に取り組むことを通して、授業や運動・スポーツに肯定的な態度を示す児童生徒を増やすことができる

と考えられる。

保健の授業との関連については、「保健を学習して、もっと運動をしようと思うようになった」と回答した児童生徒は、普段から運動する習慣を持っており、体力合計点も高い傾向にあることがわかった。どのような保健学習によって、児童生徒が運動に対して肯定的な意識を抱くようになるのか、どのような授業の学習過程が児童生徒の気付きや発見に繋がるのか等、体育と保健を効果的に関連付けられる方法を踏まえた授業改善を推進する必要がある。

児童生徒と学校の意識の差についてみると、「できなかったことができるようになったとき」に楽しさを感じているかどうかについては、児童生徒よりも学校の方が肯定的に捉える傾向が見られた。「体を動かしてすっきりした気分になったとき」に楽しさを感じるかどうかについては、女子より男子の方が肯定的に捉える傾向が見られ、男女差があることがわかった。そのため、児童生徒の意識の実態を踏まえた授業づくりが求められる。

## IV

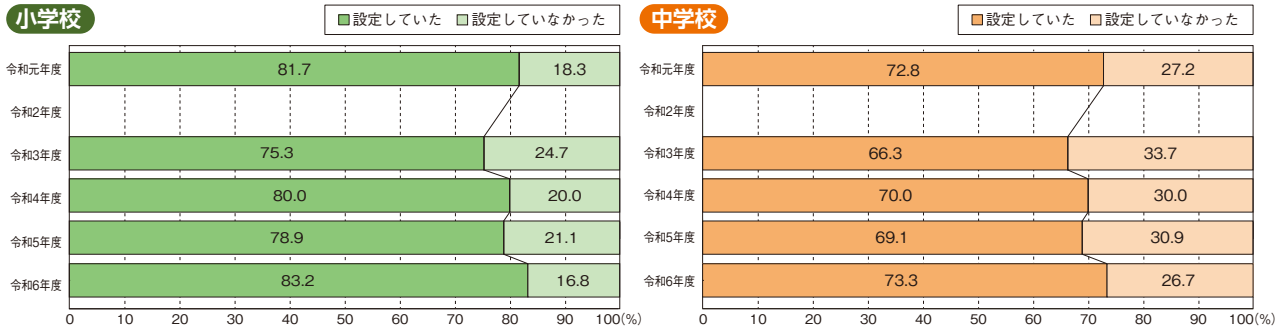
## 学校の特徴

## ■ 体力向上の目標設定(P.98)

学校全体で「体力向上の目標を設定している」学校

の割合は、令和5年度に比べ、小学校で4.3ポイント、中学校で4.2ポイント増加した[図24]。

[図24] 児童生徒の体力・運動能力の向上のため学校全体で目標を設定

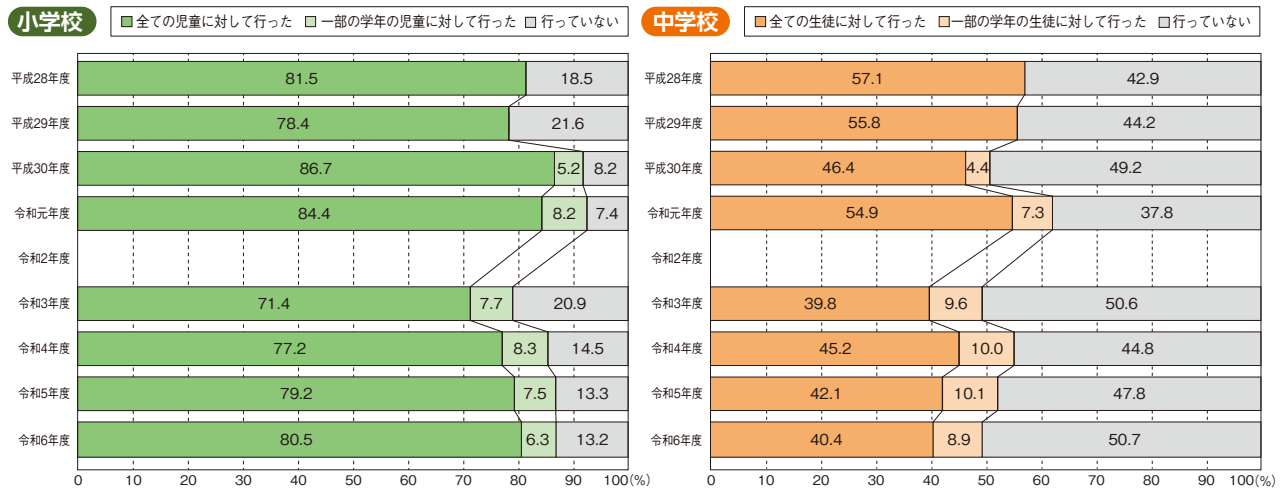


## ■ 体力向上の取組(P.98)

体育の授業以外で体力向上の取組を全ての児童生徒に対し実施している学校の割合は、令和5年度と比べ、

小学校は1.3ポイント増加した一方、中学校では1.7ポイント減少した[図25]。

[図25] 児童生徒の体力・運動能力の向上のため学校全体で取組

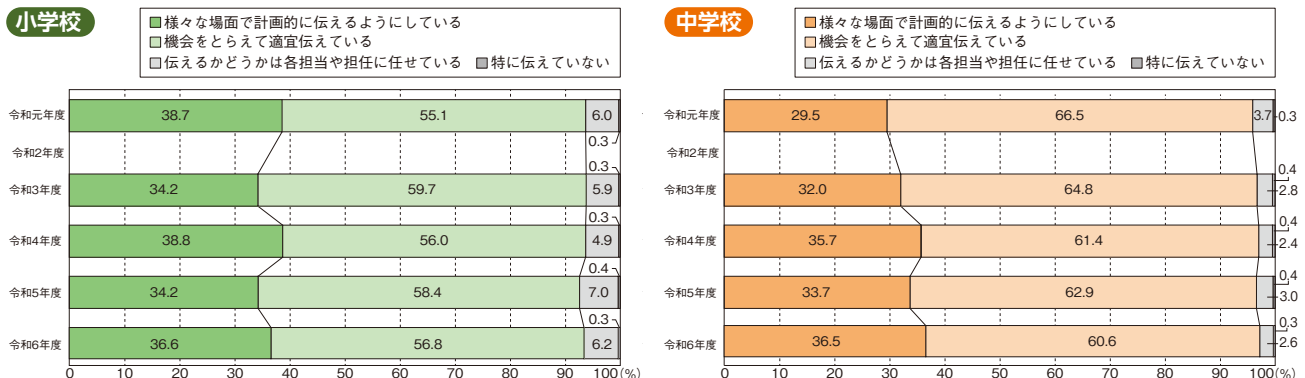


## ■ 健康三原則(運動、食事、休養及び睡眠)の大切さを、児童生徒に伝える取組(P.102)

健康三原則の大切さを「様々な場面で計画的に伝え

るようにしている」学校の割合は、令和5年度と比べ、小学校で2.4ポイント、中学校で2.8ポイント増加した[図26]。

[図26] 健康三原則(運動、食事、休養及び睡眠)の大切さを、児童生徒に伝える取組

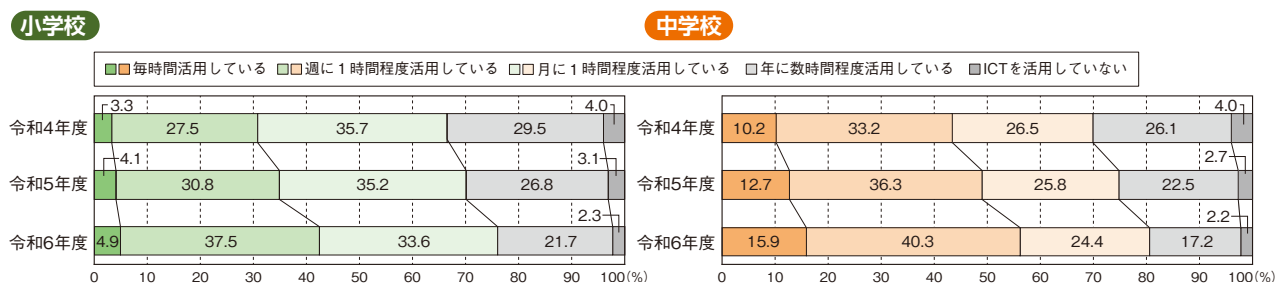


## ■ 体育・保健体育の授業における ICTの活用について(P.100)

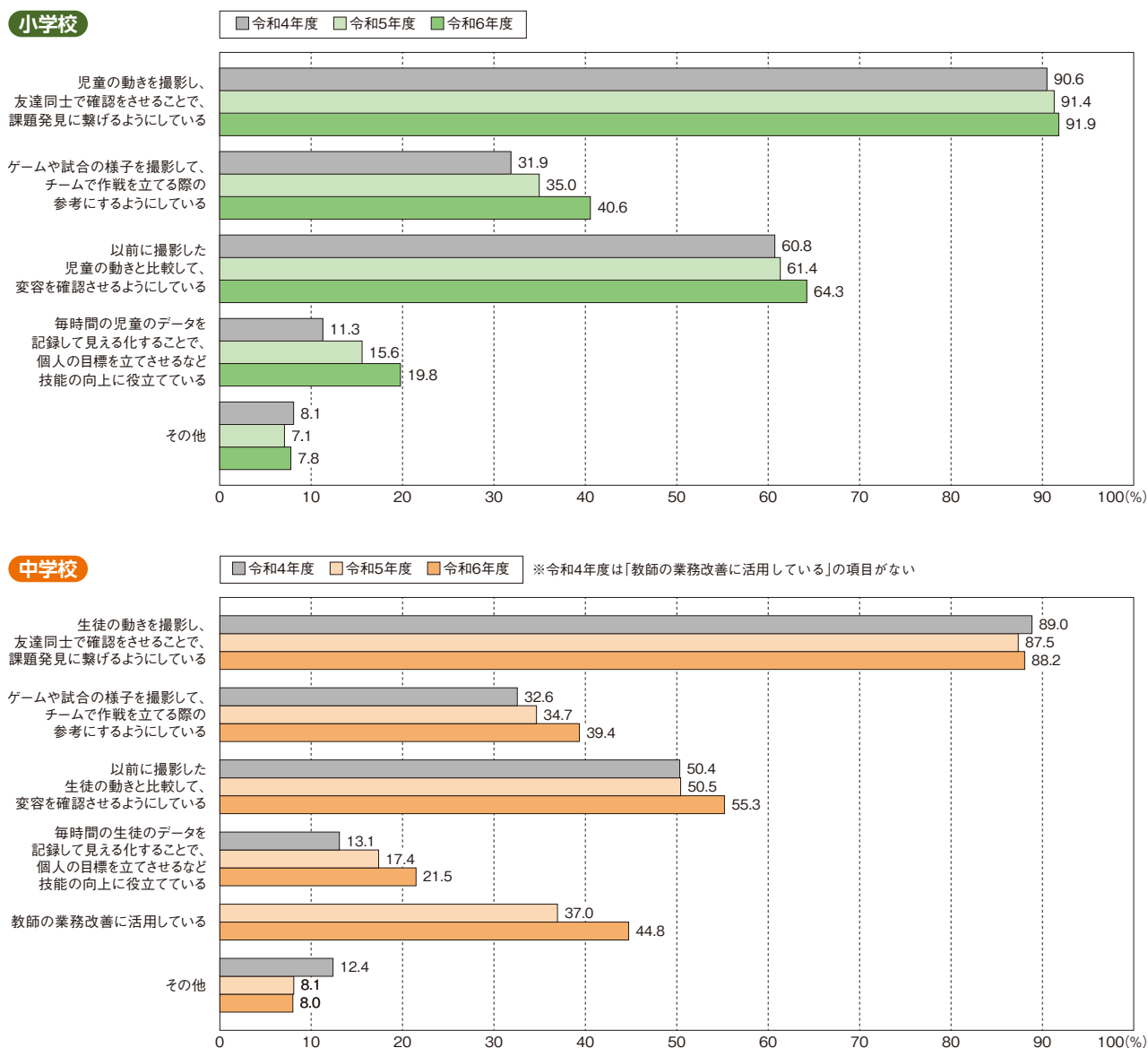
小学校は97.7%、中学校は97.8%の学校がICTを活用していると回答した〔図27〕。GIGAスクール構想により1人1台端末の整備が進んだことによると考えられる。小学校の活用状況で最も多かったのは、「週に1時間程度」(37.5%)で、中学校でも同様だった(40.3%)。

中学校では15.9%が「毎時間活用」していると回答しており、中学校でのICT活用が進んでいることが読み取れる。また、ICTの活用方法では、小中学校ともに「児童／生徒の動きを撮影し、友達同士で確認をさせることで、課題発見に繋げるようにしている」が最も多かった〔図28〕。

〔図27〕 体育・保健体育の授業におけるICTの活用の頻度



〔図28〕 ICT活用方法の経年変化



## ■ 体育・保健体育の授業で大切にしていること (P.100)

小中学校ともに、多くの学校が「体を動かすことの楽しさを実感させること」を最も大切にしていると回答しており、次いで「運動量を確保すること」や「仲間と協力して課題を解決させること」の割合が高かった[図29]。一方で、小中学校ともに「運動領域と保健領域、体育分野と保健分野の関連を図ること」と回答した学校は少なかった[図30]。

間と協力して課題を解決させること」の割合が高かった[図29]。一方で、小中学校ともに「運動領域と保健領域、体育分野と保健分野の関連を図ること」と回答した学校は少なかった[図30]。

〔図29〕「体育・保健体育の授業で大切にしていること」上位3項目

### 小学校

|    |                     |       |
|----|---------------------|-------|
| 1位 | 体を動かすことの楽しさを実感させること | 87.4% |
| 2位 | 運動量を確保すること          | 60.7% |
| 3位 | 仲間と協力して課題を解決させること   | 54.8% |

### 中学校

|    |                     |       |
|----|---------------------|-------|
| 1位 | 体を動かすことの楽しさを実感させること | 82.2% |
| 2位 | 仲間と協力して課題を解決させること   | 62.5% |
| 3位 | 運動量を確保すること          | 46.5% |

〔図30〕「体育・保健体育の授業で大切にしていること」下位3項目

### 小学校

|    |                               |       |
|----|-------------------------------|-------|
| 1位 | 運動領域と保健領域の関連を図ること             | 1.1%  |
| 2位 | 体育で学習したことを実生活で生かせるようにすること     | 3.6%  |
| 3位 | 技能の程度や、障害の有無等にかかわらず、共に学習させること | 10.8% |

### 中学校

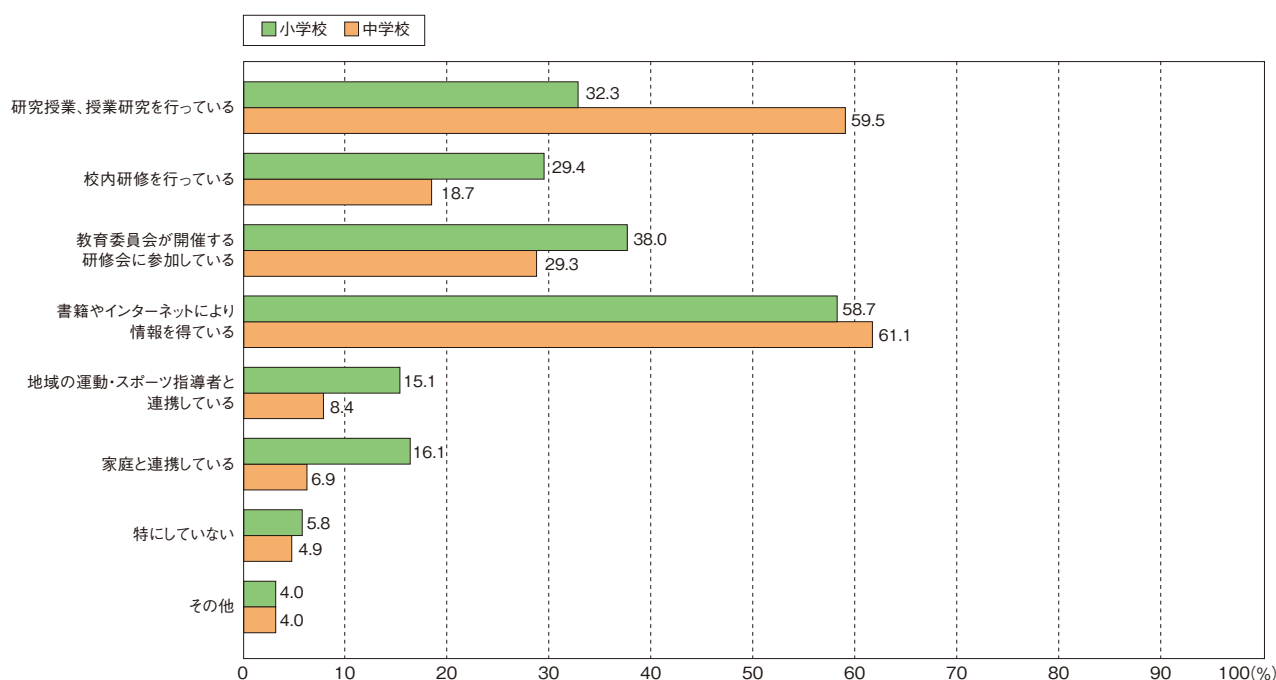
|    |                           |       |
|----|---------------------------|-------|
| 1位 | 体育分野と保健分野の関連を図ること         | 5.4%  |
| 2位 | 体育で学習したことを実生活で生かせるようにすること | 12.3% |
| 3位 | 動きのポイントなどの知識を理解させること      | 14.4% |

## ■ 運動やスポーツが苦手な児童生徒に対する取組について(P.101)

体育・保健体育の授業で運動やスポーツが苦手な傾向のある児童生徒への指導の充実のために行っている取組としては、小中学校ともに「書籍やインターネット

トによる情報収集」が最も多く、次いで「教育委員会が開催する研修会への参加」や「研究授業・授業研究」が続いた。一方で、小中学校ともに「地域の運動・スポーツ指導者」や「家庭」との連携と回答した学校は少なかった[図31]。

〔図31〕運動やスポーツが苦手な児童生徒に対する取組



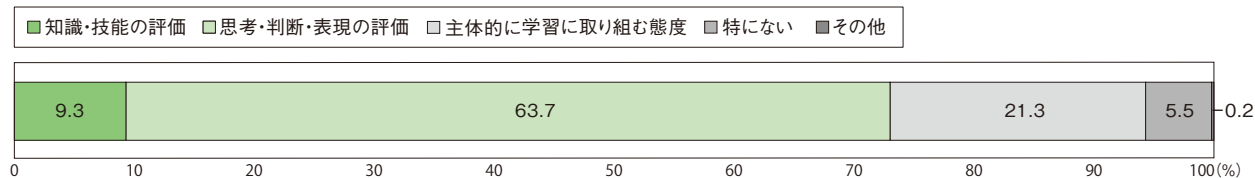
## ■ 観点別学習状況の評価についての課題(P.101)

体育・保健体育における観点別学習状況の評価に際して特に課題と感じていることは、小中学校ともに

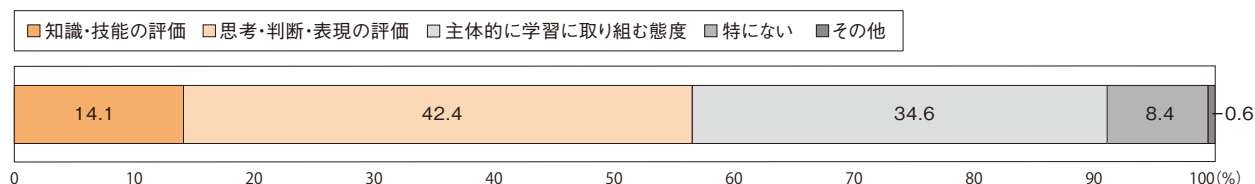
「思考・判断・表現の評価」が最も多く、次いで「主体的に学習に取り組む態度」や「知識・技能の評価」が続いた〔図32〕。

〔図32〕 体育・保健体育における観点別学習状況の評価の実施に際して、課題と感じていること

### 小学校



### 中学校



## 〔Ⅳ 学校の特徴〕のまとめ

令和5年度との比較では、「体力向上の取組」をする学校の割合に大きな変化はみられなかったが、「**体力向上の目標設定**」や「**健康三原則の大切さを伝える取組**」を行っている学校の割合には向上が見られた。目標設定は、現状とのギャップを認識し、その達成に向けた適切な取組（手段・方法）について検討・実施するための基点となるものであり、**適切に目標設定を行い、それを体力向上の取組とその評価に繋げることが望まれる**。特に、「健康三原則の大切さを伝える取組」を行うにあたっては、保護者の理解と協力が必要不可欠となる。「**運動領域と保健領域、体育分野と保健分野との関連を図る**」とともに、**保護者と連携・協力しながら、生活習慣の改善を促していくことが重要である**。

ICTについては、ほとんどの小中学校の体育・保健体育の授業で活用されており、令和5年度との比較において使用頻度にも増加が見られた。画像や映像を用いることで、模範となる動きや自身の動きを確認することは、児童生徒の学習の質を高めることに繋がり、「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力の育成にも寄与すると考えられる。一方で、「毎時間の児童生

徒のデータを記録して見える化することで、個人の目標を立てさせるなど技能の向上に役立てている」と回答した割合が低い状況にあることから、個人の目標設定やその達成に向けた計画の立案・実施などを通して、「**主体的に学習に取り組む態度**」や「**思考力、判断力、表現力等**」に関する学習指導と評価の一体化に活用することが望まれる。

「体育・保健体育の授業で大切にしていること」については、「体を動かすことの楽しさを実感させること」、「仲間と協力して課題を解決させること」、「運動量を確保すること」と回答する学校が大多数であった。これらは、児童生徒にとって、体育・保健体育の授業が楽しくなるために大切であるとともに、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成にも繋がると考えられる。「運動領域と保健領域、体育分野と保健分野との関連を図ること」と回答した学校の割合は、令和5年度との比較においてやや増加傾向にあるが、依然として低い水準にとどまることから、**両者の関連を企図した授業や研修会の計画・実施などにより、より効果的な体力の向上の取組や運動習慣の改善に繋げていくことが望まれる**。



## ■ 全体を通して

令和6年度調査における**体力合計点**は、男女で若干の違いはあるものの、**令和5年度との比較では、小学校で低下、中学校では向上しており、小学校と中学校で結果に違いが見られた**。特に、中学校男子が新型コロナウイルス感染症蔓延前の令和元年度の数値を上回った一方で、小学校女子は過去最低となっている。

1週間あたりの運動時間については、小学校では1週間に420分以上運動すると回答した女子の割合が増加に転じたほかは各回答の割合に大きな変化は見られなかったが、中学校では60分～420分未満運動すると回答した生徒の割合が男女ともに増加し、全く運動しない生徒の割合が減少している。一方で、女子については、1週間に420分以上運動すると回答した生徒の割合も減少していた。

生活習慣については、**朝食を毎日食べると回答した児童生徒の割合が小中学校とも昨年度に比べ増加したが、長期的な推移を見ると、男女ともに「毎日食べる」と回答する割合は減少傾向にある**。また、睡眠時間は、小中学校ともに令和5年度以降増加が続いている。**スクリーンタイムは、小中学校ともに全体的な増加傾向が続いており、新型コロナウイルス感染症蔓延による行動制限を経たことで、通常に戻りつつある日々の児童生徒の生活様式が変化してきていることがうかがわれる**。**引き続き、生活全体を通じた運動機会を確保するとともに良好な生活習慣が形成されるよう、学校・家庭・地域における取組を通じた働きかけを行っていくことが重要である**。

ICTについては、ほとんどの小中学校の体育・保健体育の授業で活用されており、令和5年度との比較において使用頻度にも増加が見られた。一方で、個人の目標を立てさせ技能の向上に役立てるなどの用途で活用されている割合は低くなっている。ICTについては、**運動や健康についての課題を見つけたり、その解決に向けた「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力の育成に寄与すると考えられることから、さらなる活用が望まれる**。

体育と保健の関連については、児童生徒が「保健を学習して、もっと運動しようと思ったか」という問いに対して、「思うようになった」、「やや思うようになった」と回答した割合が多かったのに対して、学校の回答では、「体育・保健体育の授業で大切にしていること」として、「運動領域と保健領域、体育分野と保健分野の関連を図ること」と回答した割合が昨年度より微増したものの依然として低い状態にある。今後、**体育と保健との一層の関連を図った指導を行うことが望まれる**。

また、運動やスポーツに対する意識と体力合計点の関係では、運動やスポーツをすることが好きと感じている児童生徒ほど総合評価が高く、卒業後の運動への意欲も高くなる傾向にあることから、**生活習慣や運動習慣に加えて、運動やスポーツに対する好意的な意識を形成する取組も有効と考えられる**。

今回の調査では、児童生徒と学校に対して「どんなときに授業が楽しいと感じるか／児童生徒がどのようなときに授業が楽しいと感じていると思うか」を質問する項目を新たに設けた。「できなかったことができるようになったとき」に楽しさを感じるかどうかについては、児童生徒よりも学校の方が肯定的に捉える傾向が見られる等、一部の項目で、児童生徒と学校との認識に違いが生じている状況がみられた。**児童生徒が授業を楽しんでいる場面を意識して、仲間と協力しながら行う取組や達成体験が得られるような授業を行うことや、児童生徒の認識を正しく見取るための工夫を行うなどの取組も求められる**。

スポーツ庁では、児童生徒が日常から運動に親しみ、生涯にわたってスポーツを継続し、心身共に健康で幸福な生活を営むことができるよう、引き続き、学校、家庭、地域における運動・生活習慣の形成や体力向上の取組を支援・促進していく。